

## 鹿児島方言における格助詞ガ・ノの分布：近現代の 談話とロシア資料を対象に

久保 蘭, 愛  
愛知県立大学：准教授

<https://doi.org/10.15017/4777924>

---

出版情報：語文研究. 130/131, pp.440-424, 2021-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 鹿児島方言における格助詞ガ・ノの分布

— 近現代の談話とロシア資料を対象に —

久保 蘭 愛

## 1. はじめに

日本語史や現代日本語諸方言における格の研究は非常に多くの蓄積があるが、特に近年、有形の格標示、つまり格助詞の形態的特徴や意味の記述だけでなく、助詞の無標示も含めた格体系や標示の条件に関する記述も多数行われている。その結果、地理的に見て日本語の格体系は多様であることが明らかになりつつある。また格標示に関わるパラメータも、名詞句の意味特性やその統語的な位置、情報構造、スタイル差などいくつも存在すること、格標示の方法も格助詞のみならず、語順やイントネーションなども関与することも指摘されてきている。

鹿児島方言を含めた九州方言では、主格助詞にガとノの両形が存在し、両者は尊卑による区別とされることが多い。他方で、これまで尊卑の別とされてきた九州方言の主格ガ・ノの対立を、尊卑も含めて動作主性として捉え直す試みが積極的になされている（例えば坂井（2013）、坂井（2018）等）。本稿ではこれら近年の方言研究の成果を承けて、近現代における鹿児島県薩摩半島北部（以下北薩と呼ぶ）地域の談話を対象に主格ガ・ノの分布を報告する。

また、鹿児島方言では主格同様、属格助詞にもガとノがある。両者の区別もまた尊卑の別とされてきたが、同じく属格でガ・ノの両形を用いる琉球方言では、名詞句のタイプによって分布が異なることが指摘されている（例えば内間（2008）、下地（2018）等）。また鹿児島県薩摩川内市甌島里方言でも属格ガ・ノの分布が待遇とともに名詞句の階層によるとされる（森他編（2015：坂井美日民執筆部分））。そこで、主格と併せて属格の分布についても名詞句のタイプという観点から談話を対象に考察する。

その上で、談話に見られる主格・属格の分布を踏まえて、ゴンザのロシア資料の主格・属格ガ・ノについても別の捉え方を試みたい。

## 2. 対象資料

近現代の鹿児島方言における主格と属格のガ・ノの使い分けを分析するため

に、鹿児島県立図書館蔵の方言ライブラリを扱う。これは鹿児島県内各旧市町村のうち88市町村で収録された明治～大正・昭和初期生まれの話者による方言談話集である。伝統方言の記録を目的としたもので、各地の音声データとともに漢字仮名交じりの文字化・対訳本が鹿児島県立図書館にて所蔵・公開されている。本稿ではこのうち北薩地域から、長島町と阿久根町の談話を近現代北薩方言資料として用いる<sup>(注1)</sup>。両地点の談話からいずれも3-40分程度を選び(長島町トラック01:29分58秒、阿久根町トラック01:45分02秒)、文字化・対訳資料を手がかりに音声聞いて用例を収集した。当時の録音状況等によって音質がさほどよくないために文字化資料で発話が記録されていても聞き取れなかった箇所は用例として扱っていない。途中共通語的になる部分も見受けられたが、それも含めて当時の鹿児島方言として扱った。挙例の際は1列目に聞き取った音声片仮名で表記し、2列目にグロスを付し、' ' 内に文字化資料を参考にした現代共通語訳を挙げる。問題になる箇所には下線を引いた。談話の地点名は用例の末尾に【 】内に示す。なお、談話中現れた固有名詞はアルファベットに置き換えた。

18世紀前半の鹿児島方言を反映するロシア資料からは、『日本語会話入門』を取り上げる。これは1729年にロシアに漂着した鹿児島の少年ゴンザとロシア人A・ボグダーノフによって作成された、ロシア語と日本語の対訳資料である。キリル文字表記の日本語部分は当時の鹿児島方言を反映しており、方言史の一端を窺うのに有効な資料と言える。6点存するロシア資料のうち『日本語会話入門』を扱うのは、本資料が文レベルであり、かつ多くが単文で主語と動詞の関係が観察しやすいためである。影印は九州大学文学部蔵のコピーを用い、翻刻・翻訳資料である村山(1965)を参考に影印から用例を収集した。本資料から挙例の際は、ロシア語文、( )内にその日本語訳、ゴンザ訳、( )内にゴンザ訳を解釈し漢字仮名交じり文にしたものの順に挙げる。ゴンザ訳はアルファベットに置き換え、問題の箇所に下線を引き、影印記載の例文番号を【 】内に併記する<sup>(注2)</sup>。

### 3. 先行研究

まず、鹿児島方言の主格助詞に関する先行研究をおさえておこう。本方言の主格助詞はガとノで、しばしば(1)に見られるような尊卑による使い分けが指摘される<sup>(注3)</sup>(下線は筆者による。(3)の用例部分の下線と(4)を除いて以下同様)。

(1) ノは敬意を含むが、ガは常体を示す。ノには述部に敬意表現を伴う。オ父サンノ来ヤツタ。しかし一般に青少年層はこの区別を失っている。また敬語表現の発達していないところは、ノを用いずガである。すなわち出水地方沿岸地、指宿郡の農村、大隅尖端部、屋久、下甕などは、もとからノ、ガの区別がないところが広い。(九州方言学会 (1991 : p.241))  
また、鹿児島方言の概要を述べた上村 (1998) は以下のように記述する。

(2) 終止文でノを主格助詞に用いることは薩隅方言では少なく、僅か薩摩西部海岸の所々と熊毛郡や十島などで使うが、原則的にノを使う処は甕島である。ただし薩隅一般に年長者では主格助詞のノが人に関するものにつく場合があって、その場合はノには敬意を含み、ガには卑下の感を伴うのである。叔母サンノ 出カケヤツタ。弟ガ 悪事 シモス。ノにヤルという尊敬語が照応するわけだ。(上村 (1998 : p.133))

主格助詞については①基本的に主格はガで、尊敬の場合にノが用いられること、②少数の地点で主格ノが現れることが指摘されるが、ノの分布が尊敬以外のどういった条件によるのかは記述されていない。

また、九州方言学会 (1991) には「バスが来た」「先生が来た」「乞食が来た」という例文での調査結果が示されている。主格「の」の地図 (調査例文「先生が / 乞食が来た」(pp.166-167)) を見ると、鹿児島方言はいずれの主語名詞句もガで標示される地点と、「先生」がノ・「乞食」がガで標示される地点が見受けられる。<sup>(注4)</sup>ここから基本的な主格助詞はガであり、尊卑によってガとノを使い分けていることが分かる。他方で、記述としては (1) のように述べられるものの、調査例文「バスが来た」では鹿児島県北部の阿久根町・長島町に主格ノの例が示されている (九州方言学会 (1991 : pp.98-99))。この例を見る限り、北薩地域のカ・ノは尊卑のみでは説明ができないことになる。

ところで、鹿児島を含む九州方言の主格ガ・ノの交替に関しては上述のような尊卑説が多いが、鹿児島県薩摩川内市甕島里方言、博多方言、熊本市方言の主格標示を扱った坂井 (2018) は、尊卑説も含めた捉え直しを提案している。主語名詞句の有生性階層と述語の他動性階層を掛け合わせたクロス階層によって主格助詞の分布を捉えた坂井 (2018) によれば、3地点ともに主格にガとノが現れるが、両者は動作主性に応じた分布をしており、G系が動作主性マーカー、N系が低動作主性マーカーであること、<sup>(注5)</sup>尊敬表現は動作主を背景化するものであることから従来の尊卑説も動作主性に基づくものであり、「尊敬表現だから尊敬マーカーN系を使う」のではなく、「尊敬表現で動作主性が下がる

から低動作主性マーカー N 系を使える」（坂井（2018：p.80））と述べている。この指摘は非常に重要であり、北薩地域のガ・ノもこの観点から捉え直すことができそうに思われる。本稿でもこの観点をもとに、談話の分析を行なう。

次に属格についての記述もおさえておこう。本方言の属格助詞は主語の場合と同様にガとノである。鹿児島方言全体について記述した上村（1994）を挙げる。

- (3) 属格で注意すべきは、「学校のだ」を学校<sup>(ノ)</sup>トジャツ　と言うが〔トは共通語の「の」に当たる指定のトから出た九州方言〕、人の所属に関する場合にはノトの外にガトがあってやはり両者の間に尊卑の区別がある。コンタ　ワイガト　ジャツ（これは君のだ）。オトーサンノトオ　モッケ（お父さんのを持ってこい）。ワイは卑下の対称である。（上村（1998：p.133））

これによれば、人を表す（代）名詞の所有を表す場合にノだけでなくガがあり、それが主格同様、尊卑の区別に基づくという。

他方で、鹿児島市方言を中心に記述した後藤（1994）は、「〔ン（ノ）〕は連体修飾語を示すのに多く用いられる」（p.142）一方で、「〔ガ〕が連体修飾語を示す場合も多い」（p.141）として、次の例を挙げている。

- (4) オヤツガ　モン（親爺のもの）  
　　オトツガ　ホン（弟の本）  
　　オイガ　モン（僕のもの）  
　　ワイドンガ　コツ（君達のこと）  
　　アタイガ　モン（私のもの）（後藤（1994：pp.141-142））

ここに挙げられた例を見ると、属格名詞句が代名詞や親族名詞に偏ることから、尊卑だけでなく、名詞句のタイプが関与しているように思われる。本稿ではガ・ノが接続する名詞句のタイプに着目して、談話中どのような場合にガが現れるかを報告する。

## 4. 談話資料による主格助詞ガ・ノの分布

### 4.1. 考察の範囲

用例を収集するにあたって、まず分析対象の範囲を示しておこう。格標示は、節タイプによって標示が異なる可能性もあるため、本来は主節と従属節で分けて分析するのが望ましい。しかし、談話という性質上、どこまでが主節であるのかが容易に判断できないことが多いため、今回は次の方針に従って、主節といくつかの従属節を一括して扱う。

まず、時間節の中のウチ節、コロ節は、連体節とともに今回は対象外とする。主節で主格ノを用いない共通語でも(5)のようにガノ交替が生じることがよく知られる。

- (5) a 太郎 {ガ/ノ} 来る所に  
 b 太郎 {ガ/ノ} 来ないうちに  
 c 太郎 {ガ/ノ} 書いた本 (作例)

ウチ節、コロ節も節が要因となってノが現れる可能性があるため、今回は一旦保留する。

問題になるのはトキ節、トコロ節である。三井(2015)によれば、鹿児島方言では形式名詞トキと助詞ハが融合して過去のタに接続し、仮定条件節を形成することがあるという。<sup>(注6)</sup> 次例を見られたい。

- (6) ホシテ ソア モ スنداトキヤー アガッテ  
 そして それ = 主題 もう 終わった = 条件 上がる - て  
 ワガエサエ モドッテ チャオ ノダイ  
 自宅 = 方向 戻る - て 茶 = 対格 飲む - 並列  
 シオン… シオンシタ  
 いいよども する - 進行. 丁寧 - 過去  
 ‘そしてそれはもう、(浜辺での仕事が) 終わったら 上がって自宅へ戻って  
 お茶を飲んだりして…してありました’ 【阿久根】

この例は「仕事が済んだときは」とやや解釈しづらく、仮定条件節と解釈できる。<sup>(注7)</sup> 過去形タ+トコロも同様に後続助詞を伴って条件節を形成する例が見られる。条件節は共通語でもガノ交替が起きないため、形式名詞トキやトコロがあっても連体節と同様に扱うのはためられる。

(7) 仕事 {ガ/??ノ} 済んだら家に帰ってお茶を飲んだりしていた。(作例)  
 そこで、本稿では条件節を表すと思しいトキ節とトコロ節を分析対象に含め、述語の項になるなど明らかに形式名詞と思われるトキ、トコロは除外する。上述の基準から、対象になるのは主節(ノダ文含む)と、<sup>(注8)</sup> 連体節・いくつかの時間節(ウチ節・コロ節)を除く従属節とする。

## 4.2. 北薩地域の主格助詞

### 4.2.1. 無助詞

阿久根町及び長島町方言談話を調査してまずわかることは、助詞の有形標示が義務的であるということである。無助詞はほとんど見られず、今回の調査範

囲では阿久根町で1例、長島町で2例見られたのみである。<sup>(注9)</sup>

(8) a アクアアシタナー サンジューハチドカラ ネットφ デタ  
翌朝 = 間投助詞 三十八度 = 以上 熱 出る - 過去

‘翌朝ね、三十八度以上熱が出た’【阿久根】

b アシケー クロカトφ オツタンデ  
あそこ = 場所 黒い = 準体 いる - 過去 = 理由

‘あそこに黒いのがいたので’【長島】

談話中の無助詞の頻度から、この方言では主格標示がかなり義務的であり、φは許容されづらいことがわかる。

#### 4.2.2. 有形格標示

次に有形標示の場合を見てみよう。有形格標示はガとノであるが、最も基本的な主格助詞は、先行研究の指摘通りガである。以下にそれぞれの地点の主格ガ・ノの数を示す。

(9) 長島：ガ87例、ノ7例（これとは別に属格の可能性もあるガ1例）

阿久根：ガ125例、ノ15例（これとは別に属格の可能性もあるノ1例）<sup>(注10)</sup>

これを踏まえて具体的に例を見てみよう。

(10) a Eガ Eガ ミヒケタツジャナ  
E = 主格 E = 主格 見つける - 過去 = 準体 = コピュラ = 終助詞  
Eツトガ

E = 引用 . 言う = 準体 = 主格

‘Eが、Eが（阿久根砲を）見つけたんだね、E という人が’【阿久根】

b カワイガワイ フネガ キオシタオ サバガ トレテ  
かわるがわる 船 = 主格 来る - 進行 . 丁寧 - 過去 = 終助詞 鯖 = 主格 獲れる - て

‘かわるがわる船が来ておりましたよ、鯖が獲れて’【阿久根】

(11) a コノヒトガ ヒキアゲタツチ ユーテカセタ  
この = 人 = 主格 引き上げる - 過去 = 引用 教えた - 過去

‘この人が（海で難破した人を）引き上げたと教え（てくれ）た’【長島】

b ヤスン トコイガ ナカチューノデ  
休む ところ = 主格 ない = 引用 . 言う = 理由

‘休むところがないと言うので’【長島】

(10) と (11) を見ると、主語名詞句や述語のタイプに関わらずガが現れることが見て取れる。

次に主格ノの例を挙げよう。

(12) a コンダ S ドンノ ハシッテ デテ ゴワッター  
今度・主題 Sさん = 主格 走る・て 出る・て いらっしゃる・過去  
‘今度はSさんが走って出ていらっしゃった’ 【阿久根】

b ドオ エーテナー アノ フネセーオ  
櫓 = 対格 押す・て = 間投助詞 いいよども 船競り = 対格  
シヨイヤッタイド オマンナ セーネンノシノ  
する・進行・尊敬・過去 = 終助詞 あなた = 主題 青年の人達 = 主格  
‘櫓を押ししてね、あの、船競りをしておられたよ、あなた、青年の人達が’ 【阿久根】

(13) a オショーノ モドイヤレバ ドゲン ユオカイトモテ  
和尚 = 主格 戻る・尊敬・条件 どう 言う・意志 = 疑問 = 引用・思う・て  
‘和尚さんがお戻りになったらどう言おうかと思って’ 【長島】

b オイゲン ババン シナレタンデ  
うち = 属格 お婆さん = 主格 死ぬ・尊敬・過去 = 理由  
キテクレヤイチユテヤ  
来る・て # くれる・尊敬・命令 = 引用・言う・て = 条件  
‘うちのお婆さんが亡くなったので、来てくださいと言ったら’ 【長島】

(12a) は目上の動作主に対して「Sドン」のような敬称があり、また「来た」の尊敬形「ゴワッタ」が見られる。また、(12b) は「シヨイヤル」、(13a) 「モドイヤル」には尊敬接辞-jarが、(13b) 「シナレタ」は尊敬と解釈できる接辞-ar (または-arur) が動作主の動作に現れている。先行研究の指摘通りこの2地点でも尊敬表現とノが共起しやすいことがわかる。<sup>(注11)</sup>

他方でそうした尊敬表現が見られない文に主格ノが現れることがある。(14) が見られたい。

(14) a アイオッタトナー ヒトダマン ダタテ  
ある・進行・過去 = 準体 = 終助詞 人魂 = 主格 出る・過去 = 引用  
‘(そういうことが) あったのよね、人魂が出たって’ 【阿久根】

b ソナー シューセンゴワ モー コメン ノイジン ミンナ  
そう = 間投助詞 終戦後 = 主題 もう 米 = 主格 ない・連用 皆  
カイモ ケケ イナカサイ ハ…  
さつまいも 買う = 目的 田舎 = 方向 いいよども  
ハシーオッタモン オマンナ



走る - 進行 - 過去 = 終助詞      あなた = 主題

‘そうねえ、終戦後はもう米が無くて、皆、サツマイモを買いに田舎の方に、は…走っていたもの、あなた’ 【阿久根】

- (15) a キュワ              フットーカ      ケダモンノ      カカトツタンデ  
 今日 = 主題      大きい              獣 = 主格              かかる - 結果 - 過去 = 理由

‘今日は大きな獣が(畏に) かかっていたので’ 【長島】

- b ギョーレツオドイーニャー      シシ…              シシコマン  
 行列踊り = 与格 = 主題              いいよども              獅子舞 = 主格

デテクットヤッドガ

出る - て # 来る = 準体 = コピュラ = 推量 = 終助詞

‘行列踊りには獅子…獅子舞が出てくるのだろう’ 【長島】

(14a) は「人魂が出た」というところに格助詞ノが現れており、尊敬の接辞は見られない。(14b) と (15ab) も同様に述語部分に尊敬表現は見られず、また主語になる名詞句が無生物名詞「米」や動物名詞「獣」であるため、話し手が敬意を持つとも考えにくい。したがってこの方言の主格ガ・ノの選択は尊卑のみでは説明しきれず、別のシステムが働いていると考えられる。

#### 4.2.3. 動作主性と北薩の主格ガ・ノ

主格標示については、先に述べた坂井氏の一連の研究や竹内 (2020) などで有生性階層と他動性階層に基づくクロス階層に基づいて分布を見ることが有効とされている。そこで、本稿でもクロス階層でガ・ノの分布を示そう。表1と

表1 長島町方言

	1人称	2人称	3人称	親族固有	人間	動物	無生物
他動詞	ガ/-	-/-	ガ/-	ガ/-	ガ/-	-/-	-/-
意志的自動詞	ガ/-	-/-	-/-	ガ/-	ガ/-	ガ/ノ	-/-
非意志的自動詞	ガ/-	ガ/-	-/-	ガ/-	ガ/-	ガ/ノ	ガ/ノ
後続省略	ガ/-	-/-	-/-	-/-	ガ/-	-/-	ガ/-

表2 阿久根町方言

	1人称	2人称	3人称	親族固有	人間	動物	無生物
他動詞	-/-	-/-	-/-	ガ/-	ガ/-	ガ/-	-/-
意志的自動詞	-/-	ガ/-	-/-	ガ/-	ガ/ノ	-/-	ガ/ノ
非意志的自動詞	ガ/-	-/-	-/-	ガ/-	ガ/ノ	ガ/-	ガ/ノ
後続省略	ガ/-	-/-	-/-	-/-	ガ/-	-/-	ガ/-

2はそれぞれ尊敬の接辞等との共起例を除外したもので、待遇的にニュートラル以下<sup>(注12)</sup>の文である。

本稿では談話から用例を収集しているため、格標示に関与するであろう種々の条件を一致させた例文を採取することはできない。しかしながら先に挙げた例と併せて大まかな傾向はつかめよう。つまり表に示したように、尊卑が関与しないニュートラルな待遇の文でノが現れるのは、やはりクロス階層の右下に偏るということである。動物や無生物名詞句が他動詞主語や意志的になることは多くはないため、そもそもそういった例が見られないセルもあるが、(14)(15)に示したように、主格ノの文は主語が代名詞の例は見られず、人間名詞・動物名詞・無生物名詞のみであり、述語に他動詞の例はなく、自動詞や形容詞の場合に偏る。

坂井(2019)によれば、「有生性階層も、他動性階層も、動作主性に換言できることから、上位層の掛け合わせ(久保蘭注:表左上)ほど、動作主性が高いと見ることができる」(坂井(2019:p.47))という。この指摘を踏まえると、熊本市方言や博多方言、甕島里方言同様に北薩方言のノも表右下に偏ることから動作主性が低いことを表すマーカーである可能性が高い。ノが尊敬表現とのみ共起するのであればノ=尊敬と捉えられようが、少なくともこの2地点に関しては動作主性との関連を考えた方がよさそうに思われる。

もちろんここに示したものはあくまで談話で得られた例であって、ノが動作主性の高い文でも主語標示に用いられるかどうか(あるいは非文になるかどうか)は今後調査する必要がある。しかしながら談話での偏りから、尊敬表現と共起したノも含めて、動作主性の低さを表すものと予測できよう。

### 4.3. 北薩地域の属格助詞

次に属格を見ていこう。現代共通語においても属格ノがカバーする範囲は非常に広く、その用法の分類も種々の提案がなされている(例えば西山(2003)、丹羽(2010)等)。本方言の属格助詞、特にノは広い意味での所有だけでなく、数量詞や場所名詞句を伴って名詞句を修飾するものも見られる(ただしガは今回の調査では所有の意味のみであった<sup>(注13)</sup>)。本稿では、それらも含めて属格助詞として用例を収集した。以下に両地点の属格助詞の数を示す。

(16) 長島町:ガ4例、ノ117例(これとは別に主格の可能性のあるガ1例)

阿久根町:ガ8例、ガン2例、ノ167例(これとは別に主格の可能性のあるノ1例<sup>(注14)</sup>)

長島町・阿久根町ともに、属格助詞はノが基本であるが、一部にガも見られる。(16)の用例数は、ワガ(自分の)、ガ+家の形、～ノシを除外したものである。反射指示ワガはこの形でしか現れず、アタイガイ・アタイガエ(私の家)、ワイゲン(お前の家の)のようなガ+家の例、特にゲの形に融合しているものはこの形で固定化している可能性があるためである。また複数を表すのにシが用いられるが(例えばシェーネンノシ(青年の衆)、ゲーシャンシ(芸者の衆)、オハンカタンシ(あなたのおうちの人たち))、これもノしか見られず～ノシの形で固定している可能性を考えて保留する。

まず属格ノを見てみよう。

- (17) a C ドンノ                      ムスコジャイロー                      シランドン  
           C = さん = 属格      息子 = コピュラ - 推量      知る - 否定 = 逆接  
           ‘C さんの息子かどうか知らないけれど’ 【阿久根】

- b ハマンコラン                      コドモカイノ                      オモイデバナシオバ  
           浜の川原 = 属格      子供会 = 属格      思い出話 = 対格  
           ‘浜の川原の子供会の思い出話を(言ってください)’ 【阿久根】

- (18) オイガ                      ユービンキョクチョー                      シトットンノ  
           俺 = 主格                      郵便局長・対格                      する - 進行 = 時 = 属格  
           シューハイニンノ                      キューリョーガ  
           集配人 = 属格                      給料 = 主格  
           ‘私が郵便局長をしているときの、集配人の給料が’ 【長島】

ノは人間名詞や親族名詞、無生物名詞の属格助詞として現れる。(17a)のように敬称ドンと共起していることから、ノが尊敬ともとれるが、(18)のように人間名詞であっても敬意の対象とは取りづらいところにもノが現れる。したがってノは尊敬の場合にも用いられるが、最も基本的な属格助詞であると言える。

一方、属格ガは固定化したものを除外すると用例数が少なくなるが、基本的に人称代名詞に接続する。

- (19) モー      コイデ      ワタイトガタ                      モ      ヤメモン  
           もう      これで      私たち = 属格 = 準体・主題      もう      やめる - 丁寧 - 意志  
           ‘もうこれで私達の(話)はもうやめましょう’ 【長島】

- (20) ワイガ      フネガ      ハヤカ      ンニヤ      オイガントガ                      ハヤカ  
           お前 = 属格      船 = 主格      速い      いいや      俺 = 属格 = 準体 = 主格      速い  
           ンニヤ      ワイガトガ                      ハヤカ      オイガトガ  
           いいや      お前 = 属格 = 準体 = 主格      速い      俺 = 属格 = 準体 = 主格

ハヤカツテ モー ケンカンゴト ナツテ  
 速い=引用.言う=て もう 喧嘩=属格=比況 なる-て

‘お前の船が速い、いや俺が速い、いやお前のが速い、俺のが速いと  
 言って、もう喧嘩のようになって’ 【阿久根】

加えて固有名詞や親族名詞に接続する属格ガも見受けられる。

(21) a ロクネンシエー ソツギョースルマデ アネガ コー  
 六年生 卒業する=限界 姉=属格 子=対格  
 カルタツジャガナ

おぶう-過去=準体=コピュラ=終助詞=終助詞

‘六年生、卒業するまで姉の子を(子守をして)おぶったのだがね’  
 【長島】

b Tガ ショニンキューワ イクラ アツカイ  
 T=属格 初任給=主題 いくら ある=疑問  
 ワヤナ T  
 おまえ=終助詞 T

‘Tの初任給はいくらあるか、おまえ、Tよ’ 【長島】

(22) アン Hガイガ ヤド  
 あの H=属格.家=属格 お宅  
 ‘あの、H一家のお宅’ 【阿久根<sup>(註15)</sup>】

属格ガが尊敬表現と共に起る例は見当たらないが、(21a)の目上の親族名詞に属格ガが現れることから、単純に卑下の場合にのみガを用いるというわけではなさそうに思われる。(19)～(22)の例から、ガは「卑」というより非尊敬の属格助詞であり、後藤(1994)で示された通り北薩においてもニュートラル以下の待遇親族名詞で属格ガが使用可能であると捉えてよいだろう。

なお、下地(2018)では、主格にガノ交替が見られる九州方言や琉球方言で、主格と属格のガ・ノの接続する名詞句の分布傾向が類似すること、主格よりも属格でノの範囲が広がることが述べられている<sup>(註16)</sup>。本稿ではこの記述を参考に、主格で扱った名詞句の有生性階層にしたがって表を作成した。

表3 北薩の属格ガの分布<sup>(註17)</sup>

	1人称	2人称	3人称	親族固有	人間	動物	無生物
長島	ガ/-	-/-	-/ノ	ガ/-	-/ノ	-/ノ	-/ノ
阿久根	ガ/-	ガ/-	ガ/-	ガ/ノ	-/ノ	-/-	-/ノ

表3と表1、2を比較すると、下地（2018）の指摘通り、主格よりもノの領域が左側に広がっていることが見て取れる。今後あらためて詳細な調査を行うが、現時点では北薩の属格ガは主格ガより狭く、代名詞を中心に親族・固有名詞まで分布していたととらえておく。

## 5. ゴンザのロシア資料における格助詞ガ・ノ

### 5.1. 先行研究

ところで、18世紀前半の鹿児島方言を反映するゴンザのロシア資料でも主格・属格標示に格助詞ガ・ノの両形が現れる。ロシア資料のうち『日本語会話入門』『新スラヴ日本語辞典』の格助詞ガ・ノを記述した江口（1990）は次のように述べる。

- (23) ゴンザの諸著作において、「ノ」と「ガ」の用法は、先ず、文法的な側面として、①「ノ」は連体格に用いられ、②「ガ」は主格の場合、「誰」「俺」「我々」という代名詞と体言を接続する場合、に用いられるという事が出来る。次に、表現的側面として、③「ノ」は述部の敬語と照応して敬意を表し、この場合には主格を表すのにも用いられる、と纏める事が出来る。これらは一八世紀初頭の薩隅方言の「ノ」と「ガ」の状態を示しているものと考えてよい（江口（1990：pp.65-66））

つまり、基本的には1人称（単数・複数）、不定人称代名詞（「誰」）のみ属格ガ、それ以外は属格ノ、主格は専らガであり敬語表現との共起の場合に主格ノが現れるという。ただし、例外的に敬語表現との共起以外で主格ノが現れる場合も指摘されており、それは①連体節内や並列句「～か、～か」、②述語が形容詞である、③動詞の否定形が述語になる、④一部の動詞が述語になる場合で、特に②の場合が多いという。

江口（1990）が指摘する例外的な条件、特に主格ノの場合に述語に偏りが見られるという点は非常に興味深い。本節ではこの指摘を踏まえて、特に例外的な主格ノと属格ガについてロシア資料と北薩談話<sup>(注18)</sup>を対照する。

### 5.2. ロシア資料と北薩談話の比較

改めて『日本語会話入門』と近代談話の主格ノを対照すると、尊敬表現とノの共起はロシア資料と近現代の談話で一致している。他方で待物的にニュートラルな文に現れる例外的な主格ノ、つまり江口（1990）の②～④のタイプはど

う考えればよいだろうか。ロシア資料から例を挙げよう。

- (24) a ロシア語：площадь широка или узка (平地は広いか又狭いか)  
ゴンザ訳：farno firokaka mata cemeka (原の 広かか また 狭いか) 【15】
- b ロシア語：полдень свѣтлый (真昼は明るい)  
ゴンザ訳：firno akaka (昼の 赤か) 【75】
- c ロシア語：топорь вострый или тупый (斧の切れるか切れないか)  
ゴンザ訳：jok'no kIjurka kIlenka (ヨキ (=斧) の 切ゆるか 切れんか) 【76】

(24a-c) はいずれも主語名詞句が無生物名詞である。述語は(24ab)が形容詞であり、(24c)は動詞だが「切れる」「切れない」は非意志的自動詞であり、主語の属性を表している。このように、資料中、ニュートラルな待遇の主格ノと解釈できそうなものは、いずれも主語が有生性階層の下位に位置する名詞句で、述語も形容詞や、動詞であっても非意志的自動詞になっている。近現代の北薩談話で見られた分布と同様の分布を示していることから、ノと尊敬表現の共起も含めてやはりロシア資料の主格ノも動作主性の低いことを表すマーカーとして捉え直せるように思われる<sup>(註19)</sup>。

次に属格について対照してみる。『日本語会話入門』の属格は江口(1990)に挙げられているように基本的にはノで、1人称と「誰」のみがだが、北薩の談話では親族名詞まで属格ガが見受けられた。両資料で分布に差があるように見えるが、この食い違いをどのように考えればよいだろうか。

考えられる可能性の一つは、歴史的変化の結果、つまり18世紀前半の時点で狭かった属格ガの領域が後代に広がったという可能性である。ただ、ロシア資料以前の属格ガの領域が中央語史と同様に固有名詞や人称代名詞などにも接続できていたのだとしたら、一旦18世紀頃の段階で1人称に限られ、その後再び属格ガの領域が広がったということになり、あり得べき史の変遷か否かを考える必要がある。しかしながらそもそも中央語と同じ歴史を辿ったという保証はないし、ロシア資料以前のまとまった方言文献も望めない現時点では想像の域を出ない。また、ガの領域が広がったり狭まったりしながら現代に至ることも考えられ、この可能性がなかったとは言い切れない。

もう一つの可能性は、資料性、特にロシア資料成立時のゴンザの置かれた状況に要因を求めるものである。少年ゴンザの漂流時、周囲にいたのはおそらく大人のみで、漂流後は20歳ほど年上のソウザと行動を共にしていた。もしかす

ると尊敬の対象になる目上の人間しか周りに居ないという環境によって（そして日本語を話す唯一の相手であるソウザを指すのに属格形が尊敬ノで現れていたために）、2人称以下の人間名詞にガが現れづらかったという可能性も考えてみてよいように思われる。いずれにせよ、現時点で確証が得られず決しがたいため、属格に関しての結論は2つの可能性の提示に留めたい。

## 6. おわりに

本稿では近現代の北薩の談話を中心に格助詞ガ・ノの分布について論じた。ここまで述べたことは以下の通りである。

- (25) a 北薩の談話では基本的に有形格標示が義務的で、ガ・ノが主格標示に与る。
- b ガが基本的な主格助詞で、ノは尊敬表現との共起例も含めて動作主性が低いことを表すマーカーと考えられる。
- c 属格助詞はノが基本であるが、有生性階層の高い位置にある名詞句（親族名詞まで）はガで標示可能である。
- d ロシア資料で指摘される主格ガ・ノの分布について、近現代同様、ノが低動作主性を表すと捉え直せる。
- e 属格については18世紀以降の近現代鹿児島方言においてガの領域が広がった可能性と、資料成立時のゴンザの状況から2人称以下にノしか現れなかった可能性が考えられる。

なお、格標示の記述を行うのであれば同じ北薩地域での面接調査が必須であった。しかし調査が難しかったため、本稿をもとに予測を立てて今後調査を行う予定である。<sup>(注20)</sup> また、本稿では焦点の有無までは検討しなかったが、今回の調査過程で焦点もガ・ノの選択に関与していると思しい例が見受けられた。今後、焦点を条件に入れた検討も行いたい。

今回の談話では、予想以上に他動詞主語を明示した他動詞文が見られなかった。特に人称代名詞などは、主語が標示されなくとも文脈上主語が推定できるという側面もあろう。また格助詞による標示システムだけでなく、主語名詞句を表示せずに目的語名詞句のみ表示するというシステムも含めて、本方言の格体系のあり方を検討する必要もある。この点も今後考えたい。

学問は巨人の肩に立つものであるとはいうものの、本稿は他人の輝で相撲を取ったような形になってしまった。先行研究のありがたみを改めて感じた次第である。

- (注1) 方言ライブラリは均質な方言談話としての資料的価値が高い(児玉(2010))とされるが、文字化は完全なものではないためやや注意を要する。抄訳のみの地点、文字化や対訳のない地点もある。方言ライブラリは地点ごとに話題や談話参加者数及び男女比、司会による談話進行の有無等が異なる。地点によっては複数のグループに分かれて会話を始めたために発話が聞き取りづらいものや、テープの劣化や録音環境のためにノイズの大きい録音もある。長島町と阿久根町の談話は、参加人数は多いものの、比較的発話が聞き取りやすい地点であったため使用した。
- (注2) ロシア語の現代日本語訳は村山(1965)に拠った。日本語のキリル文字表記の置き換えは次の通り。a =a, б =b, в =w, г =g, д =d, ж =z, е =e, з =z, и =i, й =ï, к =k, л =l, м =m, н =n, о =ω =o, п =p, р =r, с =s, т =t, у =u, ф =f, ц =ts, ч =te, ш =c, Ъ =E, ю =ju, ъ =jo, я =ja, ы =ui, Ъ = ' Ъ =”。ロシア語・日本語部分に付されるアクセント符号は今回の議論に関わらないため省略した。
- (注3) 他に、瀬戸口俊治氏の鹿児島県岡見ヶ水方言に関する報告で「[カ°・ガ]は、通常の主部形成に関与する。一方、「ノ・ン」による主部形成には、敬・卑効果が伴う。」(九州方言学会(1991:p.508))と記述がある。また、鹿児島方言全体について述べた木部(1999)でも「主格助詞は「ガ」と「ノ」で、「ガ」に比べると「ノ」の方が敬意が高い。」(p.19)と述べられている。ほかに、鹿児島市方言を中心に記述した後藤(1994)では連体節の主語にノが現れることが記述されているが、それ以外の従属節や主節の主語はガのみが挙げられている。
- (注4) これ以外に大隅半島に1地点「先生」も「乞食」もノでマークされる地点がある。なお、ンはノの異形態と捉える。以下では代表させてノと表記する。
- (注5) 坂井(2018)のG系はガ、N系はノヤンを指す。
- (注6) 共通語でも条件節に近いトキ節がある。
- (注7) 条件節と時間節の解釈は連続的で、どちらにも解釈できるものも談話に見られる。
- (注8) なお、除外したウチ節・ココ節・トキ節・トココ節について補足しておくとして2地点とも主格ガが多い。連体節では主格ガ・ノともに現れるが、ガが優勢である。したがって用例として分析対象に含めても結果に差はなかったかもしれない。
- (注9) 無助詞の例のうち(8a)は、笑いながらの切れ切れの発話であるためという発話時の状態も関係しているかもしれない。
- (注10) ( )内にある属格とも主格とも解釈可能な例は分析対象から除外している。
- (注11) もちろん尊敬表現を含む文で主格ガが現れることも多い。なお、尊敬と解釈できる接辞-ar (-arur)については別に論じたい。
- (注12) 表の説明をしておく。述語のタイプに関して：坂井(2013)にならって動詞の自他に加えて、自動詞を意志性の有無によって2つに分けた。ただし意志的自動詞か非意志的かはやや判断に迷うところもある。特に、(15b)「出てくる」のような存現文は、今回意志的自動詞に入れたが、今後別に考える必要がある(坂井美日氏からのコメント)。「非意志的自動詞」には形容詞も含めた。「後続省略」は、談話という特性上、後続の述語が発話されなかったものである。文脈から推定可能な箇所もあったが、一旦保留にしている。名詞句のタイプに関して：「神様」、「人魂」、「小学校長」などの役職は人間名詞に、「獅子舞」は動物名詞に入れた。「市」などの人間のコミュニティはどこに入れるべきか判断が難しいが、今回は人の集合としての例文だったため、人間名詞に入れている。「黒かと」のような準体助詞は、文脈上何を指しているかで分類した(人を指すと想定できる例は人間、モノ



やコトを指す例は無生物扱い)。その他：該当する用例の見当たらなかったものは「-」と表示する。「/」を挟んで前がガ、後ろがノである。尊敬表現との共起例は表に入れていないが、丁寧語との共起例は表に入れた。また可能表現のガ(「食べがなる」)、対象を表すガ(「～が分かる」)も除外する。φ(3例)は表に入れていないが、いずれも動作主性が低い文であることを付け加えておく。

- (注13) ガが所有の意味に偏る可能性は佐々木冠氏にコメントを頂いた。今後現代方言でも改めて調査したい。
- (注14) 2例見られるガンをどう扱うか判断に迷うため、今回は扱っていない。
- (注15) (22)は、「H ガイガ ヤド」で直訳すれば「H の家の家」となるが、「H 家のお宅」と解釈し、「H 一家」という人間の集まり=固有名詞と捉えた。
- (注16) また内間(2008)によれば、宮古島(伊良部町長浜・下地町来間)方言、徳之島方言、瀬底島方言において、共通語の影響も見られるものの、主格と属格のガノの分布が一致していることが指摘されている。これらの論文については白田理人氏(志学館大学)にご教示いただいた。御礼申し上げます。
- (注17) 表中の「-」は用例が得られなかったものである。「/」の前がガ、後ろがノである。
- (注18) ゴンザのロシア資料の主格φは分析を行っていない。理由は主題ハと名詞句との融合にある。ロシア資料では助詞の融合が激しく、特に語末aの名詞句はハと融合したものなのか、それともφなのか、形の上から全く判断がつかない(ロシア資料の助詞の融合規則は江口(2006)を参照されたい)。そのためここでは主格φの許容は検討せず、ガ・ノのみを扱う。
- (注19) 動詞の否定形も状態性述語と捉えることが出来よう。
- (注20) 一部アンケート調査を実施したが、本論には反映させられなかった。なお、今回扱わなかった薩摩半島の他地点では、種々の先行研究に記述がある通り動作主性というよりもはやノに尊敬の意味が焼き付けられている可能性のある地域もありそうである。この地域差については別稿を準備している。

#### 【使用テキスト】

『日本語会話入門』…九州大学文学部図書館蔵コピー本(原本東洋写本研究蔵)

『方言ライブラリ』「6-1 阿久根市方言」「50-1 長島町方言」…鹿児島県立図書館蔵

#### 【参考文献】

- 内間直仁(2008)「琉球方言における助詞〈が〉〈の〉の用法」『言語文化論叢』5
- 江口泰生(1990)「一八世紀初頭の薩隅方言における「ノ」と「ガ」の用法」『語文研究』69
- 江口泰生(2006)『ロシア資料による日本語研究』和泉書院
- 上村孝二(1998)『九州方言・南島方言の研究』秋山書店
- 木部暢子(1997)『日本のことばシリーズ46 鹿児島県のことば』明治書院
- 九州方言学会(1991)『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書房
- 児玉望(2010)「方言音声コーパスの韻律構造表示～鹿児島県立図書館方言採録テープの分析～」『ありあけ 熊本大学言語学論集』9
- 後藤和彦(1994)『鹿児島方言の語法研究』横浜総合印刷
- 坂井美日(2013)「現代熊本市方言の主語表示」『阪大社会言語学研究ノート』11
- 坂井美日(2018)「九州方言における主語標示の使い分けと動作主性」第156回日本言語学会発表資料

- 坂井美日 (2019) 「熊本市方言の格配列と自動詞分裂」竹内史郎・下地理則編『日本語の格標示と分裂自動詞性』くろしお出版
- 下地理則 (2018) 『シリーズ記述文法1 南琉球宮古語伊良部島方言』くろしお出版
- 竹内史郎 (2020) 「上代語の従属節、主文連体形・已然形節における主語標示——ガ、ノ、無助詞における意味的、統語的な制限の検討——」青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究』5 ひつじ書房
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論——指示的名詞句と非指示的名詞句——』ひつじ書房
- 丹羽哲也 (2010) 「連体助詞「の」の用法記述のために」『人文研究』61
- 三井はるみ (2015) 「九州西南部方言における順接仮定条件表現体系の多様性——熊本市方言と鹿児島県伊集院町方言——」『日本語史の研究と資料』明治書院
- 村山七郎 (1965) 『漂流民の言語』吉川弘文館
- 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦編 (2015) 『甌島里方言記述文法書』国立国語研究所

【付記】本稿は、国立国語研究所シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア——日本の言語・方言の対照研究を中心に——」で発表したものの一部を修正したものである。席上、また個別にご指摘・ご教示いただいた。記して御礼申し上げる。なお、本稿は科研費「ゴンザ・タタリノフ・レザノフのロシア資料について集大成のための文献学的研究」（代表・江口泰生）、「日琉諸語の有標主格性に関する基礎的研究」（代表・下地理則）、「文献とフィールドワークによる方言史の再構築」（代表・久保蘭愛）の助成を受けた。

(くぼぞの あい・愛知県立大学准教授)